

[北総文化研究センターから]

北総文化研究センター主催「研究会」の経過報告（その8）

今年度は第42、43、44の合計3回の研究会を開いた。その概要は以下の通りである。

第42回研究会

1. 日時 平成20年1月18日(金)

教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「アラビア数字の認知処理からみた数表象モデルの検討」

報告者 柳生崇志 講師

4. 報告要旨

数情報がどのように表象され処理されるのかという問題は解明されていない点が多く、これまでにいくつもの数処理モデルが提案されてきた。たとえば、入力された数情報は「単一表象モデル」では呈示された数の形態がどのようなものであっても単一的で抽象的な数概念として表象されるとするが、「トリプルコードモデル」では呈示される数の形態にかかわらず（1）アラビア数字表象、（2）言語的（音韻的）表象、（3）アナログ表象のいずれかに表象されるとしている。

一見するとまったく異なるように見える数処理モデル間において、数処理のアナログモデルとよばれる特徴は各モデルに共通する部分である。アナログモデルでは、知覚された数は“大きさコード”とよばれる連続的な物理量に変換され処理され、この大きさコードは数表象に必ず含まれると仮定する。この数処理のアナログモデルを支持する現象に距離効果（比較する2つの数字の値の差が大きいほど反応時間が短くなる）やSNARC効果（数直線のようなアナログ表象を用いて、小さい数は左、大きい数は右という空間配置と数表象を適合させる現象）などがある。また、距離効果やSNARC効果を巧みに組み合わせた Stroop効果の現象も同様にアナログモデルを用いて説明が行われてきた。しかし、Stroop効果のように、数情報に含まれる複数の属性のすべてについてアナログモデルを適用しようとする、Stroop効果にみられる「競合」が知覚段階のものなのか、反応段階のものなのかの区別が曖昧になり、そのプロセスを明確にすることができない。そこで、アナログモデル以外のモデルとして「分離可能性（見分けやすさ）モデル」を取り上げ、Stroop効果などの現象が説明可能かどうかを検証し、

Stroop効果が生じる原因を明らかにするための実験を行った。

実験は、CRT上に左右並べて視覚呈示される1桁のアラビア数字を見て、数値またはフォントサイズの大きい方を選ぶという課題を用いた。実験計画は $2 \times 2 \times 2$ の3要因被験者内要因で、1つめの要因はタスク（数値判断/フォントサイズ判断）、2つめの要因はターゲット属性の分離可能性（高/低）、3つめの要因はディストラクタ属性の分離可能性（高/低）であった。実験刺激は2～8までの7種のアラビア数字で、それぞれの数字について大きさの異なる7種のフォントサイズであった。

実験の結果、タスクとターゲットの交互作用、タスクとディストラクタの交互作用がそれぞれ有意であり、またターゲットの主効果とディストラクタの主効果もそれぞれ有意であった。これらの結果から、数処理におけるStroop効果はターゲットの分離可能性が低いかまたはディストラクタの分離可能性が高いときに増大することがわかり、またアナログモデル以外でも説明可能で、その説明としては制御的処理の結果、反応競合が生じていると考えるのが妥当であるということがわかった。

第43回研究会

1. 日時 平成20年5月16日(金)
教授会終了後
2. 場所 2号館2階会議室
3. テーマおよび報告者
テーマ「雑草考(3) 一水稲栽培におけ

る除草方法の変化―]

報告者 田中 学 教授

4. 報告要旨

(1) 除草方法の展開方向

最初の回で述べたように、雑草についての日本人の考えには、大きく分けて2つのものがある。1つは「雑草魂」といわれるような、踏まれても、踏まれても再生するような「たくましさ」、あるいは「しぶとさ」という強さ、という側面に対する評価である。確かに、道路などでは舗装面の少しのひび割れ面などにも、雑草が芽生えているのは珍しくない。

他方は、その強さゆえに、それが農業の世界では栽培植物のいわば「天敵」として扱われるという側面である。これもすでに述べたように、和辻哲郎はその著書『風土』のなかで、アジアモンスーン地域の農業を「雑草とのたたかい」と表現している。日本その他、アジアの稲作地帯では稲の成長期である初夏から盛夏の「高温多湿」は、雑草にとっても成長期にあたるからである。日本においても、田植え以後の稲作作業においては、「除草作業」が大きな比重を占めてきた。稲の栽培技術は総合的なものであり、除草作業だけを分離してとらえることには限界があるが、そのことを前提とした上で今回は稲作における除草方法の展開過程について報告する。

稲作に限らず、除草作業はまず手作業に始まる。手作業の延長として、種々の道具が用いられるようになるが、それ以降は、大きく3つの展開方向に分けて検討することが可能になる。1つは、工学的方向であり、たとえば除草機の改良・開発である。もうひとつは、化学的方向であり、いわゆる除草剤（農薬）に代表される。第3は、生物学的方向であり、

これはむしろ稲の側の品種改良や、遺伝子組み換えなどで、雑草に対する抵抗力の強い稲を開発する方向である。

（2）近世稲作と除草作業

近世の稲作は、総収量増加の方向としてマクロにみると、2つの方向に向かった。1つは、開墾、干拓、水利事業など水田面積そのものを拡大する面的展開である。もうひとつは、単（反）収の増加を目指す労働集約的技術と対応する農具の改良・開発という、いわば質的展開である。時期的に明確な区分は出来ないが、しいて言えば前期は前者が中心であり、後期になると両者が並行し、特に後者の展開が顕著になる。しかし、除草作業に関するかぎり、近世においては雁爪などの道具が中心で、その限りでは基本的に手作業の段階にあった。

（3）明治・大正・昭和戦前期

明治維新以降の殖産興業時代に入ると、田打車、太一車などの回転式・手押し中耕除草機が開発・改良され普及していった。これらは、除草作業の効率化とともに、肥料投入の増加や正条植えなど、いわゆる「明治農法」の一環をなすものであった。また、ごく端的ではあるが、化学的方法の模索がはじまり、明治末期からは大学の農学部において「雑草学」の研究が行われるようになった。

（4）戦後における除草剤（農薬）の開発・普及

戦後の化学薬品は、まず占領軍による2・4・Dの導入に始まる。その後、昭和20年代後半には稲作においても、病害（主としてイモチ病）防除、虫害防除、さらには除草剤へと化学的方向への展開が急速に進んだ。その結果、昭和30年代前半には、特に水銀剤系

統農薬による人的被害も発生し、やがて水銀剤系統の農薬の製造・使用は禁止されるに至った。しかし高度経済成長と農業基本法制定以降、農業においても労働生産性の向上（省力化）が大きな課題となり、伝統的な除草作業にかわって、農薬の使用が一般化していった。

レイチェル・カーソンが『沈黙の春』を書いて、農薬の多用が自然界に及ぼす被害について警告を発したのは昭和30年代末（1964）のことであるが、省力化農業の流れは止らなかった。ただ、農薬の使用に対する反省の機運が徐々にではあるがたかまり、合鴨農法などそれにかわる除草方法に対する種々な試みが始まったことも確かである。

第44回研究会

1. 日時 平成20年11月21日(金)

13:00～14:20

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「西行・遊女・猫一広重「浄瑠璃町繁華の図」から西行伝承を考える―」

報告者 宇津木 言行 教授

4. 報告要旨

西行伝承研究は、伝説（口頭伝承）を資料とする民俗学の立場、説話・地誌（書承伝承）などを資料とする説話伝承学の立場から行なうのが主流であった。本報告は歌川広重の「浄瑠璃町繁華の図」という浮世絵を資料として、芸能史と美術史のかかわりの中で西行伝承を考える立場を取り、西行伝承研究に新境地を

開くものである。

まず広重の絵の書誌・内容を説明した。「浄瑠璃町繁華の図」は人形浄瑠璃の場面を江戸の商人が物を売る様に見立てた戯画であり、9枚の作品が現存する。風景画の巨匠・広重の戯画として従来の作品評価は低調である。そのうちの1枚に7図が描かれている中の1図は僧が花魁に招き猫を売るの図であり、浄瑠璃『軍法富士見西行』にもとづくとも推定されるから、僧は西行、客の花魁は物語の中で生き別れて遊女となった西行の娘と判じられる。招き猫が描かれた最古の図として一部の招き猫愛好家の間には知られていたが、西行伝承研究者にはほとんど知られていなかった。

絵図自体の解釈として二つの視点から分析がなされた。第一に絵図に描かれた招き猫は「丸メ猫」と称した今戸焼の土人形と分るが、西行も遊女（花魁）も今戸人形の題材であったことから、本図には浄瑠璃の人形を人間に見立て、さらにそれを今戸人形に見立てるという複雑な喩の構造が意図されていたであろうこと。第二に花魁の着物の柄は「柳」であり、柳の意味するところを探ると、遊女においては花柳界を寓意し、遊女対猫においては「猫柳」という洒落を含み、遊女対西行においては西行がワキとなり、柳の精と対面する謡曲「遊行柳」を匂わせているであろうこと。さらには図の表面に描かれたのはあくまで僧と遊女の出会いであり、見る者に浄瑠璃の知識があれば父娘の再会であると判じられる点に、親子が知らずに契りを結ぶ近親相姦の主題が隠されている可能性も指摘した。

次に本図における西行・遊女・猫という題材はすべて西行の実伝および実伝と信じられ

たことに淵源することを紹介した。西行と遊女の出会いは『山家集』に、西行と生き別れた娘の再会は『発心集』『西行物語』に、西行と猫の逸話は『吾妻鏡』に見いだせる。この三つの素材を大胆に組み換え、他の物語を接合して数奇な演劇に仕立てたのが浄瑠璃『軍法富士見西行』だが、この浄瑠璃作品を絵画化した草双紙（江戸の絵本）が数種ある。その草双紙の中に広重が種本とした可能性のある一本を指摘した。また草双紙は歌舞伎の大きな影響を受けているといわれ、浄瑠璃『軍法富士見西行』は歌舞伎としてもしばしば上演されているから、広重が一方で歌舞伎の脚色に想を得た可能性も指摘した。

このように西行の実伝に由来する西行・遊女・猫という三つの題材は、文学から芸能、美術へと様々にジャンルを越境して転変しながら変容し、ついに広重の浮世絵において西行が遊女に招き猫を売るの図が出現するに至る過程を明らかにした。

最後に芸術作品として評価の低かった広重の戯画が文化史的視点から改めて解釈される必要のあること、また職人としての広重の画業を再評価する必要があることを示唆して報告を終えた。

なお、この研究は平成19年度卒業生・伊藤侑子さんの卒業論文「招き猫をめぐる」のもとになった演習報告で広重の絵が示されたことに端を発する。感謝すると共に、教育と研究の相関を身をもって体験しえたことが報告者には意義深かったことを付け加えておく。

5. 主要な質疑討論など

猫のモチーフについて、ヨーロッパの絵画に描かれた猫との比較、また日本における猫

という存在の持つ意味について質疑応答があった。古くは狐が遊女を象徴する動物であったが、江戸時代ころから猫が遊女の象徴のひとつとなったことなどをめぐって討論が交わされた。僧と遊女の出会いという場面の宗教的意味について、洋の東西を比較した議論もなされた。絵の見立てや象徴性の解釈については、戯作文学の文章における表に表れた意味と裏に隠された意味との関連が問われた。